

ニュースポーツの変容過程に関する研究（2）

～ニュースポーツ実施者のスポーツ価値意識を中心に～

○山田力也（福岡大学） 谷口勇一（財団法人福岡市体育協会）

1. 目的

前述の研究の（1）においては、ニュースポーツの変容過程を、特に制度化と競技志向性に着目しつつ検討を試みた。

結論として報告者らは、実施者に対する意識調査の分析結果からニュースポーツの変容が生じていることを確認することとなった。そのことは、「明らかな競技志向性の向上」と「ニュースポーツのメジャー化」を示唆するものであり、今後そのような傾向がより強まるものと推察した。

それを受け、本研究（2）では、主にニュースポーツ実施者のスポーツ価値意識とともに、「レクリエーション」に対する意識に焦点を移行し、ニュースポーツの変容動向に関するより詳細な検討を試みることにする。

2. 研究方法

調査対象者・調査方法については、研究（1）と同一であるが、「スポーツ価値意識」に該当する回答結果の解釈を、下記の理論枠組みに従って検討を行った。

1) 「スポーツ価値意識」の理論的枠組み

一般に価値意識とは「ある主体が世界の中のさまざまな客体に対して下す価値判断の総体」¹⁾であり、スポーツ価値意識は「スポーツ行動の諸局面における価値判断の総体」²⁾と捉えられる。

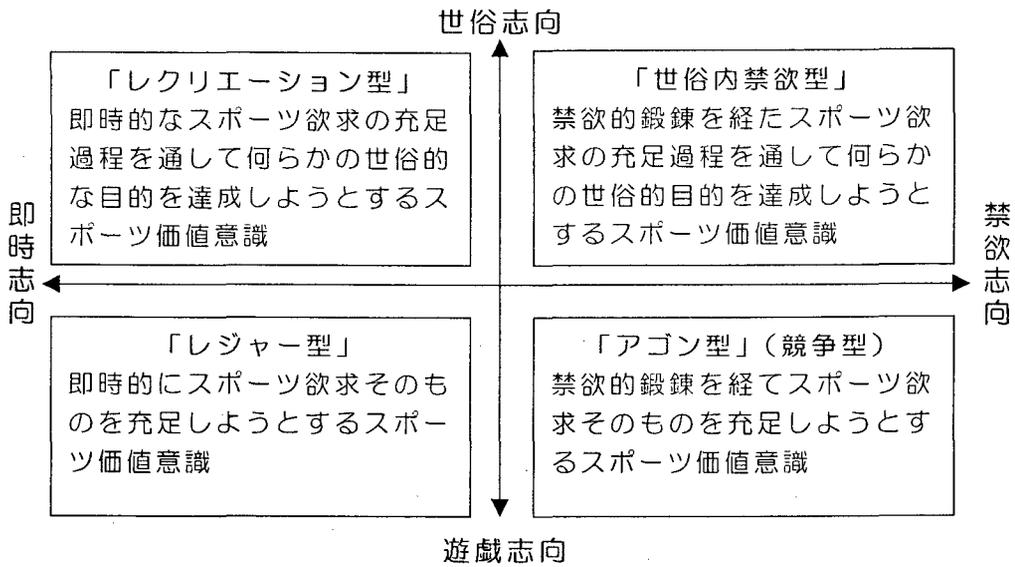
さらに松尾³⁾はスポーツ価値意識を探求することについて、「個人のスポーツ行動特性やそのスポーツ組織や集団の特性、さらにスポーツの特殊性を明らかにすることのみならず、その国における一般的な価値意識の解明にも貢献し得るという意味において、極めて重要な作業である。」と述べている。

以上、スポーツ価値意識を探ることの重要性を確認したところで、本研究では、上杉による2つの基準軸を基にしたスポーツ価値意識の四類型に準拠し分析を行うことにする。

3. 結果と考察

1) スポーツ価値意識構造の把握

ここでは、下記の図1⁴⁾、上杉による2つの基準軸を基にしたスポーツ価値意識の四類型に準拠し、ニュースポーツ実施群および非実施群間の比較検討を行うことでニュースポーツ実施者のスポーツ価値意識構造を明らかにしていきたい。



上杉による「スポーツ価値意識の四類型」

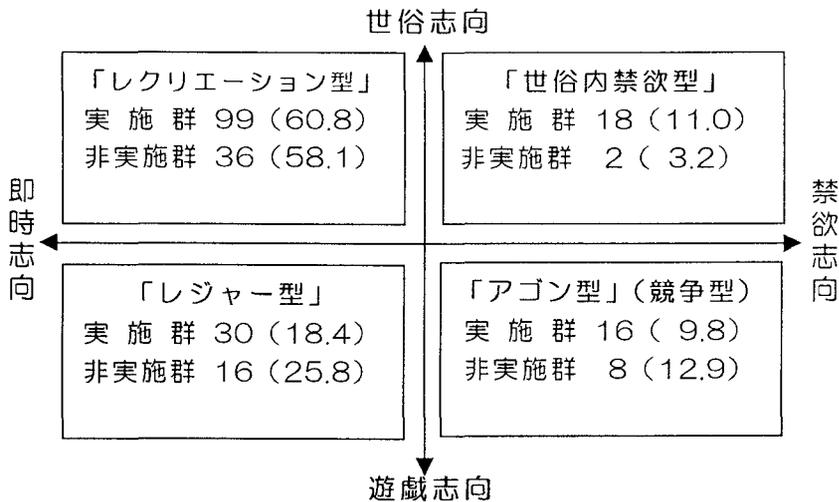


図 1. ニュースポーツ実施群、非実施群におけるスポーツ価値意識分類 N(%)

両群のスポーツ価値意識(図1参照)は、ともに約6割を占める「レクリエーション型」となっている。しかし、4つのスポーツ価値意識のうち、両群の割合に差が認められたものとして「世俗内禁欲型」(実施群11.0%、非実施群3.2%)、「レジャー型」(実施群18.4%、非実施群25.8%)の2つの意識が挙げられる。

以上の結果、ニュースポーツ実施群のスポーツ価値意識は、非実施群に比べて「世俗内禁欲型」のスポーツ価値意識が強い傾向を示すものであったが、両群共に「レクリエーション型」をベースにしていることが明らかになった。

2) レクリエーションに対する意識

次に、ニュースポーツ実施群および非実施群のレクリエーションに対する意識を把握することで、ニュースポーツ実施者のレクリエーション観を明らかにしていくこととする。方法としては、レクリエーションに関する13の項目を設定し、それぞれに対する考え方の程度を「5 強く賛同する」～「1 まったく賛同できない」の5件法によって訊ねた。なお、13項目の設定にあたっては、簡易的予備調査を実施している。

回答結果の分析にあたっては、回答カテゴリーを間隔尺度とみなし、それぞれの項目ごとに平均値を算出し、t検定によって両群の比較検討を試みた(表1)。

表1. レクリエーションに対する意識

項目	実施群平均値	非実施群平均値	t検定
交流の場	4.54	4.56	
出会いの場	4.43	4.64	**
遊び	4.16	4.31	
ストレス解消	4.33	4.18	
スポーツ	4.10	3.66	***
創造力の向上	3.91	3.97	
自主性	4.12	4.31	*
連帯感	4.41	4.26	
協調性	4.28	4.28	
面倒くさい	2.08	2.54	***
はずかしい	2.04	2.72	***
わざとらしい	1.81	2.33	***
マニア的	1.83	2.15	*

* 5%以下 ** 1%以下 *** 0.1%以下

分析の結果、両群ともに平均値の高い項目としては、「交流の場」、「出会いの場」、「協調性」となり、両群のレクリエーション観は、「コミュニケーション・スキル要素」として捉えることが可能であろう。逆に、平均値の低い項目は、「面倒くさい」、「はずかしい」、「わざとらしい」、「マニア的」といったものであり、レクリエーションのネガティブなイメージに対しては、全体的傾向として否定的であることがわかった。

さらに、両群におけるレクリエーション観の差異を検討する目的から、t検定を行ったところ、有意差がみられる項目としては、「出会いの場（実施群 4.43・非実施群 4.64）」、「スポーツ（実施群 4.10・非実施群 3.66）」、「自主性（実施群 4.12・非実施群 4.31）」、「面倒くさい（実施群 2.08・非実施群 2.54）」、「はずかしい（実施群 2.04・非実施群 2.72）」、「わざとらしい（実施群 1.81・非実施群 2.33）」、「マニア的（実施群 1.83・非実施群 2.15）」の7項目であった。

このなかでも特に注目したいのは、0.1%水準以下の危険率で両群間に有意差を確認している「スポーツ」であろう。この「スポーツ」に関しては、実施群ほど賛同の意向が強いことがわかる。このことから伺いしれるニュースポーツ実施者のレクリエーション観としては、レクリエーションの有しているいくつかの要素、すなわち、前述のコミュニケーション・スキルの部分に対しては大いに肯定的であることから、レクリエーションの本質的理解はなされている。しかしながら、それだけではとどまらないレクリエーションの有するゲーム性や、さらには競争性に対する期待度が比較的高いといえそうである。

4. 結語

本研究では、今後のニュースポーツの変容過程を予測する目的から、ニュースポーツ実施者のスポーツ価値意識と、レクリエーションに対する意識に焦点を当て検討してきた。その結果、ニュースポーツ実施群のスポーツ価値意識は、非実施群と共に「レクリエーション型」をベースにしていることが明らかになった。しかし、そのレクリエーションに対する両群の意識を比較してみた場合、レクリエーションを「スポーツ」として捉えている傾向がニュースポーツ実施群の意識において、より顕著に表れていた。この傾向は、全国スポーツ・レクリエーション祭の参加者の競技意識に対して行った調査⁵⁾において報告されている「参加者の極めてチャンピオン志向の競技者に近い『準競技者』的な意識が特徴として見られる」とほぼ符合すると思われ、今後、ニュースポーツがより競技志向性を強めていく可能性が高いことを示唆する結果となった。つまり、今日のニュースポーツは「発当初の競技スポーツに対するアンチテーゼとしての存在意義を有していた」ものから、その「質」が変容してきていることが明らかである。その変容の要因を解明していくことが今後の早急な課題となってくると思われる。

主要参考・引用文献

- 1) 見田宗介他編（1988）「社会学事典」弘文堂。pp.146・147.
- 2) 上杉正幸（1990）「スポーツ価値意識のパターンとその規定要因に関する研究」昭和 62・63・平成元年度科学研究費補助金（一般研究 C）研究成果報告書。p.200.
- 3) 松尾哲矢・山本教人・吉田毅・谷口勇一（1997）「第 18 回ユニバーシアード大会 1995 福岡参加選手に関する調査報告書」p.32.
- 4) 上記 2) に同じ。p.2.
- 5) (財)日本体育協会編（1992）「平成 3 年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 No. VII 中高年者のスポーツ参加に関する社会的・心理学的研究 - 第 1 報」日本体育協会.
- 6) 江刺正吾（1998）「柔らかい文化としての軽スポーツ」奈良女子大学文学部スポーツ科学教室編『やわらかいスポーツへの招待』.